

# 岡山市埋蔵文化財発掘調査速報展2008

## 岡山城三之外曲輪跡 岡山市蕃山町

調査地点は岡山城の最外郭、岡山藩藩学が置かれていた部分にあたり、市立岡山中央中学校の体育館の建設に伴って発掘調査を実施しました。調査は平成18年度からの事業で、本年度は主に岡山藩藩学開校以前の遺構面が対象です。

藩学の造成土の下には、岡山城三之外曲輪が造成される17世紀初頭から藩学が作られる寛文9年(1669)までの遺構面がありました。藩学以前には寺院や武家屋敷があり、溝やゴミ穴、井戸が見つかりました。特に、調査区中央の溝からは陶磁器や椀、下駄などの木製品、鉄砲の弾などが出土しました。また、精錬炉の破片やふいごの羽口が大量に出土し、江戸初期にはこの付近に鋳物などの工房があったようです。

また、さらに下層からは平安時代の水田跡、弥生時代後期の溝や粘土採掘坑が見つかりました。

## 国宝 吉備津神社 本殿および拝殿の保存修理

国宝吉備津神社本殿・拝殿は、岡山市吉備津に位置し、応永32年(1425)に足利義満が再建したもので、「比翼入母屋造り」(別名・吉備津造り)と呼ばれる独特の形式の屋根でよく知られています。

今回の修理は、檜皮葺の屋根の葺き替えを中心として、内部の彩色等の修理をおこないました。修理期間は、平成16年度からはじまり、平成20年9月30日に終了しました。修理と平行した調査では、本殿の創建時代に極めて近い年代を示す墨書もみつきり、本殿の歴史を考える上で重要な発見となりました。

修理期間中は素屋根に覆われていましたが、現在、素屋根も取り払われ、約40年振りに葺き替えられた美しい檜皮葺の屋根を見ることができます。

## 大供本町遺跡 岡山市大供本町

大供本町遺跡は市道建設工事に伴い調査されました。この遺跡のあたりは平安時代から室町時代にかけて藤原氏の有力荘園のひとつであった鹿田荘の一画をしめており、2005年度の隣接地での調査では平安時代から江戸時代にかけての溝や多数の建物跡、井戸、貝塚などが見つかりました。今回の調査でも溝・建物跡などが確認され集落の広がりが判明しましたが、注目されるもののひとつは奈良時代の井戸です。この井戸からは須恵器や土師器の壺・甕などのほか墨書土器や釣瓶などとして使用されたと見られる木器、多量の植物の種子などが出土しました。また、調査区の東端で見つかった大溝は奈良時代から平安・鎌倉時代にかけての大量の土器が出土したほか、溝の各所で貝塚が見つかりました。出土した土器のなかには墨書のある土器や緑釉陶器、輸入陶磁器などがあり、このほか、ウシ・ウマイノシシ・ウミガメなどの動物骨なども出土しています。

## 北国長遺跡 岡山市国府市場

北国長遺跡は岡山市国府市場に所在し、旭川東岸の標高約7mの微高地上に立地します。周辺は、備前国府関連遺跡群として周知されており、発掘調査が実施された遺跡もあります。今回は、トレンチ4本の発掘調査を行い、平安・古墳・弥生時代の遺構面が検出されました。

【平安時代後期～鎌倉時代初期】トレンチ全面で周密に遺構が認められ、T3井戸とT4土壌墓では良好な遺物が出土しました。また、周辺での調査事例の成果をあわせると備前国府が時期ごとに移動している可能性が指摘できます。

【古墳時代中期～後期】遺構はやや少ないが調査区全体で認められます。T1・T2付近では中期の須恵器、T3・T4では後期の須恵器が多いです。竪穴住居等が検出されます。

【弥生時代後期】遺構は、集落の縁辺部にあたり少なくT4の南端部の竪穴住居等の検出とどまります。また、特殊器台が出土しており、南国長遺跡との関連が推定されます。

## 岡山城本丸下の段 岡山市丸の内

2006年度の確認調査でみつかった遺構の広がりや残存状況を確認するため調査を行いました。元禄13(1700)年に作成された、『御城内御絵図』によると、今回の調査範囲からは「蔵」と「役宅住居」および、井戸が見つかると思われました。

調査の結果、『御城内御絵図』に記載されている建物2棟(蔵・役宅住居)の基礎および井戸が当初の想定通りみつきりました。これらの遺構は幕末まで利用されていたと考えられます。また戦国時代末～江戸時代初期にさかのぼる可能性のある生活面の一部を確認しました。岡山城の変遷を知る上で重要な発見です。

出土遺物は江戸時代の瓦・陶磁器などが多数出土しました。その中でも、棹秤の権(分銅)が目立ちます。権は出土例があまりなく、県内で初の出土例と思われます。同じ形の権が、15～16世紀に栄えた福井県の一乗谷朝倉氏遺跡で出土しています。

## 安住院多宝塔

岡山県指定重要文化財

現在修理中の多宝塔の床下から鎮壇具が見つかりました。一般的な建物では土地の神を鎮めるための儀式として「地鎮」が行われますが、「鎮壇」とは寺院の堂舎などで須弥壇を設ける前に行う儀式で、今回見つかった遺構の一部が掘り返されていたものの、多宝塔の完成直前に行われた鎮壇儀の状況がほぼ完全な状態で残されていました。

多宝塔の基礎部分は亀腹とよばれる盛土に礎石をすえる構造となっており、鎮壇具はこの亀腹の構造を調査する過程で発見されました。亀腹の中央には一辺が1.2m四方で深さ50cmの四角形の穴が掘られ、中央に鎮瓶(蓋をついた壺)を埋め、五組の玉石が入った皿を並べて埋め、最後に8枚の輪宝を立てて埋めるといったもので、この鎮壇具は多宝塔が完成した寛政4年(1751)当時のものとみられ、江戸時代の密教儀式を知るうえで貴重な発見となりました。

